
…は？世界の管理者？…まあ、やるしかないのだろうな…

霧氷黄泉路

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

…は？世界の管理者？…まあ、やるしかないのだろうな…

【Nコード】

N9056R

【作者名】

霧氷黄泉路

【あらすじ】

…え？俺死んだのか…まあ、面白そうだし転生するかな。転生先…？ISですか、そうですか。まあ、風吹くままに気ままにいいこうかね！

※注意！ この小説は作者のオリキャラ、オリIS、オリ展開、ご都合主義、独自解釈、キャラ崩壊など作者の妄想爆発で構成されています。当然のようにオリ主は原作ヒロインにフラグを立てますのでそれらが嫌な方はご注意ください。それで良いという方は呼んでください。初作品なので、色々至らないところが多いと思います。

良ければ感想や、こうしたらよいか、等々教えてもらえると有難いです。

プロローグ 一俺の転生した瞬間一（前書き）

…変な文章かもしれないので注意。

思わす書いた文だから下手かもしれないが…

それでも良いという方だけ読んで下さい。

プロローグ 一俺の転生した瞬間一

白い空間が辺りを包みこんでいる。

「…ここは、どこだ？」

そんな事を言っても帰ってくる言葉は無い。

と言うか喋れているのか？

なんとなく身体の間隔が無い気がするのだが…

兎に角、どうしてこういった状況になったか振りかえることにするかね…

俺はいつも通り早起きし、洗濯物を干してから大学へ自転車で向かった。

その途中で親友と会って適当な話題を話しながら学校へ着く。

学校内の事は大体普段通りだったはず。

放課後は親友の家に遊びに行った。

そこまでは特に問題が無かったと思う。

家に帰ってから何をし…ぬ？ 帰って…む、う？

帰った後の記憶が…無い？

確か…友達の家からそろそろ夕食時だというような時間になったから帰ることにして、自転車で帰ってたら…

……………っっ！？

そうだ！いきなり視界が反転してすぐにブラックアウトしたんだ…

…どういふ事…だ…？

頭の片隅では分かっているが、それを本能が拒否している

「結論だけ言うとおぬしは死んだのじゃよ」

…ぬう…やはりか…

それよりも俺の知人にあなたの様なピントがぼやけた幽霊みたいな方はいなかったと記憶しているのだが…

「ほっほっほ、落ち着いておるのお。自分の死をわかっていてそこまで冷静なのも珍しい」

いや、正直困惑の感情が一周どころではないぐらい暴走してだな…
って思考がすでに大分おかしくなってるか…

「それでも見た目冷静なのじゃからすごいと思うのじゃが？」

まあ、これは俺の数少ないスキルの一つだしな…
…む？そういえば今俺喋ってなかったはずだが…
この爺さん読心術でも使えるのか？

「それはじゃな、わしがおぬしの知識で言う世界、又は創作の中で

言う根源と呼ばれるような者じゃからの、それぐらい（読心術）はたやすいのじゃよ」

…ふむ、そうなのか

何かオチが見えた気がするが…

とりあえず俺が読んでいたSSみたいな展開になりつつある気がするのだが…

「…反応が薄いのう…とりあえずおぬしが考えているのより上位の存在で、おぬしが考えている存在を管理するための存在みたいなもののじゃが。」

さらりとすごい事言っていないか？この人…人なのか？

まあ、その辺りはわからないしな…

とりあえず何故そんなに高位の存在が俺の前に現れたのだ…？

いや、俺が呼ばれたのか？

すると、驚くことに世界さん一便宜上世界さんと呼ばせて貰う一は頭を下げた。

…ぬう？

何故頭を下げた？…なんとなくはわかるが…

「先ず、おぬしに謝らなければならぬのじゃ。わしの勝手でおぬしを都合のよい道具のようにしてしまうことを、じゃ。」

ふむ…？

とりあえず続けてくれ

「うむ、わしの管理している神と呼ばれるものが、物語の世界に好き放題に転生者を送ってその物語の世界をゆがめてしまっているのじゃよ…このままじゃと世界が歪み、崩壊してしまうので、それを防ぐためにおぬしを抑止力としてしまおうのじゃ…」

…ふむ。

あれか、それは某無限に剣を創れる守護者の様になるのか？

「いや、それとは少し違くてのう、わしが必要だと判断した際に依頼するからそれ以外の時は他の世界でのんびりと過ごしていいのじゃよ。それに依頼の時にはわしが支援するからの、わしと同格以上の存在でない限りは万が一ということはありえにからの、安心して欲しいのじゃ。」

理解した。

…依頼の内容は？

「簡潔に言うとな、転生者や介入者の始末に加え物語の修正、又は何らかのアクシデントで転生や介入してしまった者の手伝いくらいかのう？まあ、数人処理してくれば充分じゃよ。わしが世界を直す際にその世界の修正力を増幅させて直すからの。」

…面白そうだな。

それにすでにこの身は死んでしまった身、受けるしかないだろう。

「それについては悪かったとしか言えぬ…じゃが…そんな簡単に同意しても良いのか？」

このまま普通に過ごすよりも色々体験できそうだしな？それになにも当てが無いよりはあんたみたいなさぐい存在が俺の生活を保障してくれたほうが良いじゃないか。

「なら良いのじゃが…とりあえず住む世界はどうするのじゃ？」

ふむ…ISがかなりお気に入りだったからな、その世界にIS使えるようにで。勿論原作主人公とかに憑依とかじゃなくて男でね？

…そういえば私が原作ブレイクしても良いのか？

「わしが特別措置で許可するぞ。それにお詫びとこれからの生活で必要になるであろう能力などをおぬしが希望しただけつけてやろう。…許可が難しいから制限する能力もあるからの？」

おお！それは有難い！能力の事も原作ブレイクの事も。

とりあえず能力はー…つと…

先ずISの世界に行くなら必要であろうISで…ふむ、アレだな。

………

今思い描いたような奴出来る？

「ふむ、出来るぞ。中々恰好良いのではないかの？SRWAのヴァイサーガをベースにしてソウルゲインの肘の刃をつけて、マントの下にソリッド・ソードブレイカーにオーバー・オクスタンライフルじゃの？とりあえず魔改造してIS自体の装甲、マント、武器の強度とシールドエネルギーをあげておくからの。マントの強度は某歩く教会の数倍に物が出し入れできるように改造しておいたからの。待機状態はおぬしの要望通りに銀と翡翠のフレームに黒い盾と剣の装飾がついているヘッドギアじゃからの。考えてなかったようじゃが一応ワンオフアビリティーは…そうじゃの…オーバーライドなんてどうじゃ？それと他にもディストーションフィールドなど色々つけておくからの。ほいっと」

世界さんが柏手を打つような動きをするとお店に売っているようなマネキンに俺の要望通りのISが装備されて現れる。

え？ちょ！？その鬼面、まさかのペルゼインの鬼菩薩ですか！？

ディストーションフィールドとか…堅い…

しかもそのマント…どこの夜笠ですか…

更にオーバライドとかどこのマキナ…

何と、言いますか…ものすごい魔改造ですね！

自分でいておいて何だがな…

それと細かい点まで色々感謝だな。

やっぱり恰好良いよなあ、この機体。

次は、身体能力は重要だろうからな、それなりに上げておいてもらえますか？

「うむ、気に入ってもらえたようで何よりじゃ。身体能力はおぬしが住む世界では不審に思われぬ程度に上げておくからの。まあ、他の世界に行くときは違うがの。」

有難い。

他にはなんだろ…魔法の素質とかかな？

それなら使ってみたかった奴があるからそれで。

………

「ふむ、了解した。魔力や精神力、気はわしからの支援で無尽蔵だからの？ それを使いこなせる才能も。…それにしても珍しいものを、というか普通考えないのではないかの？ 治癒や解呪や防衛はわかるがこれはの…世界からの支援が無いとほとんど撃てないがかなりえげつないのう…」

あらら…魔力とか有難いです。

他はF a t eの直感とかのスキルかな…？

「うむ、了解した。それとおまけじゃ、無限の剣製の様なものを追加しておくからの。様なもの、というのは、他にも色々創れるからじゃ。」

…チートですね

最後にですね、何か変身能力みたいなものと従者のような感じの人か動物を…

「そうじゃの…変身能力は普通につけられるとして、従者は何が良いかの？少し記憶を読みとらせて貰って自分が深層で従者にしていと思っっている存在で良いかの？」

それで良いです。

…記憶読みとられるのは既にこの状態なので諦めています

「…すまぬの。ついでおぬしの肉体も最適なものを創るからの。……ふむ。わかったぞ。ほれ。」

そういえば肉体無かったのだったか…

と俺がそんなことを思っている間に世界さんは記憶を読みとってか

らまた柏手を打つ動作をした。

すると先ず俺の目の前に居た世界さんのピントがぼやけていたような感じが無くなりその上自分の体の感覚が戻った。

…ふと下を向くと先ほどまで何も見えなかったはずの身体があった。つまり、世界さんは俺の身体を創ってくれたことになる。

因みに世界さんは喋り方と声で判断した通りの好々爺でした。

世界さんが更にもう一度柏手を打つと私の見知った、更にはお気に入りの架空の人物が目の前に現れた。

…ただし立ったまま動かないが。

鮮やかな朱色の髪をポニーテールにし、身体は小さいその娘。

それは…T O Fの藤林すずに酷似していた。

何故酷似かというと、やはり彼女は架空の人物なのえ実感がわからないのと、髪の毛の色が少し違う事、それに加え、…少し、いや結構身体の一部が大きくなっていたからである。…何故に。

「その辺りはおぬしの深層にあった願望としか言えぬのう。おぬしの身体はわし印の特製じゃぞ。色々すごいことになっておるからのほれ鏡じゃ。」

世界さんが言った言葉に少し、いやかなりかな…ショックを受けながらも渡された鏡を見ると、俺の好きなキャラが写っていた…これ俺か？

髪の色が漆黒で眼の色が碧眼であること以外はそのままS R Wのキョウスケ・ナンブだった。

「こんなものかろう？後は色々夜笠の中に入れておくぞ。ああ、それとじゃな、おぬし名前を変えないといけないからの？色々不都合があるためじゃ。」

色々すいませんね…

名前か…そうだな…黒神^{くろかみ} 翠銀^{すいぎん}なんて言うのはどうだろうか？

「ふむ、良い名じゃの。それではおぬしに幸あらんことを祈っておるぞ。その世界に行く時期は原作のメンバーと同じ年で幼少期からの介入という形で良いかの？」

はい。それで構いません。

「そうかそうか、ならば…ぬ？」

…？どうしましたか？

「…ふむ、紛らわしくてすまんかったの。おぬしに問題があったのではなく、こっちで問題が発生したんじゃないよ。」

…あ、そうなんですかなら良かった。

問題起きたから良くないのかな？

「まあ、何が起きたかと言うとじゃな、わしの部下の奴がな、下界の者を死亡させてしまったらしいのじゃよ。」

…あ？

「それでのう…転生させろとその者がうるさいらしくどうしたものかとわしに判断を仰いだのじゃよ…これぐらいのことは自分で判断してほしいのじゃがな…」

…えーと…何と言いますか…なんかすいません…

つか何言ってるんだその馬鹿は（転生させろと言ってる奴の事）
転生させろって…テンプレばかりだと思ったら大間違いだぞ…

「転生するおぬしが言ってもあまり説得力ないと思うのじゃが…」

それは気にしないでください（汗）

「まあ、それでじゃな、程々の力を与えて転生させることにしたらしいのじゃが、どうやらわしの部下が間違っておぬしが行くはずだった世界に送ってしまったらしいのじゃよ。しかもそやつ思考が

主人公のハーレム？は！そんなのさせねーし！オレがハーレム作るから！…という思考の上、願ったことに対女子限定の魅了チャームがあるらしいのじゃよ…」

…えええ…それは…ちよつと色々思考が逝つてるな

そいつが物語に介入しない確立は…いや、どうせ確定で介入するだろう？

…はあ、絶対にのんびりできないだろうなあ…

「すまんかった。部下に代わって謝ろう。」

良いですよ、もう決まった事でしようから。

それならそれで楽しめば良いと思ってますし。

「とりあえず主要キャラクターには魅了チャームが効かないようにはしておいたぞ。一応言っておくがお主のISの機体性能はイレギュラーの機体を含めその世界最強じゃからの、その辺りは心配しなくても良い。」

あ、それは良かった。

あのキャラクター達がイレギュラーの毒牙にかかるのは見たくなかったから。

「ま、それは兎も角として、余程緊急の事が無ければ仕事等はおぬ

しがIS学園を卒業したぐらいに連絡するからの。第二の人生、楽しんでくるのじゃぞ？」

はい、色々ありがとうございました。

あなたもお元気で！

「では…また会おうぞ、黒神翠銀よ…」

とその言葉とともに柏手を打つと私の視界は白くなり、気を失った。

ブログ 一俺の転生した瞬間一（後書き）

とりあえず、駄文かもしれませんが、読んで下さってありがとうございました。

：まあ、何を後書きとか書けばいいのかわからるので、適当に。

感想なんかあるとは思えませんが、注意とか、ここをこうすればいいとかあったら言って下さい。

第一話 原作開始…ねえ？（前書き）

続けて投稿…期待はしないでください…

第一話 原作開始…ねえ？

IS、正式名称＜インフィニット・ストラトス＞ 宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーマル・スーツ。総機体数h世界で467機。とある事件を切欠に「パワードスーツ」として軍事転用が始まり、各国の抑止力の要がISに移っていった。十年経った現在では世界各国の軍に第2世代機が標準配備され、第3、第4世代機の研究開発が進んでいる。

その戦闘能力はそれまでの主力であった戦闘機や戦車をも凌ぎ、世界そのものを変貌させた。

しかし、そのISの唯一の欠点、それは女性にしか扱えないこと。これにより緩やかに男尊女卑から男女平等に変わっていた世界は急激に女尊男卑が当たり前となった。

ここは亡国某所の地下研究室、そこで俺と相棒たる少女は何時間にもわたりとある作業をしていた。そして、その作業も終わる。

「よし、これで終わったはずだ。どうだ？ 楓。」

「はい。これで調整が終わりですね。お疲れ様でした。翠殿」

楓と呼ばれた鮮やかな朱色の髪に金色の瞳をした静かな雰囲気纏う小柄な少女が受け答えをする。

この少女の名は「黒神 楓」

纏った雰囲気と同じように大抵の場合は静かなのだが、とあることになるとその雰囲気から一転して年相応の少女っぽくなる。

因みに俺の名は「黒神 翠銀」

黒髪で碧眼：だったのだがとある事件で左目の瞼の上に大きな裂傷を作り、右目も一時的に光を失ったので眼が見えない。

左目は眼球までは傷が届かず瞼だけだったので光を失わず瞼の傷口が塞がればもう左目は大丈夫らしい（傷は残るらしい：これがな：）右目の方はもう少しで治療終わるらしく、それまでは眼を開けるなと言われている。

治るのは両目とも同時期ぐらいと言われたがな：

「ならばここもいる意味も無いな、撤収の準備をするか。」

「そうですね、では片づけておきますので、翠殿は束殿に連絡をつけておいた方が良いでしょう？」

「ふむ、確かにそうだな。ならば撤収の方頼んだぞ、楓。」

「御意。」

「ふむ：確か束さんの連絡先はこれだったはず：『プルル、ピッ』
もしもし、たb『はいはい。いつも心に太陽を！すーちゃん久しぶり♪』：はあ、途中でぶった切らんでくれ：束さん：それとすーちゃんと呼ぶなと何度言ったか：」

そう、電話の相手はテンションがいつも妙に高い、ISの開発者である篠ノ乃東博士こと、束さんである。

何故俺がすーちゃんなどと呼ばれているかは、『すーちゃんはすーちゃんだもん。』だそうで、何度言っても直らず、俺はもう諦めた。

『えーいいじゃんいいじゃんすーちゃんと束さんの仲じゃないか』

「：はあ、もう諦めたからまあ良いですけどね：とりあえず本題です。アレの調整が終わりましたよ、その報告です。」

『おう流石はすーちゃん仕事が早いねえ！じゃあ束さんからお願いあるんだけど、いいかな？』

「頼みごとにもよりますが、何です？」

『ふっふっふー何だと思う？』

「自分で振っておいてそれですか…電話切りますよ？」

『わ、わー！？うそうそ！ちゃんと言うから！』

「で、何ですか？束さん。」

『実はね、いっくんに関係することなんだけどね。あ、すーちゃんはいっくんがIS動かした事知ってる？』

「…は？あいつIS動かしたのか？」

ふむ、遂に一夏はIS動かしたのか…原作の事を知っているとはいえ、もう俺はこの世界の仕組みなどを知ったため、やはり半信半疑になるわけで…

まあ、俺はIS動かせたんだがな。

その話を振ってくるとなるとやはり一夏関係だろうな…

『うんうん。それでねーちゃんがいっくんのことをすごく心配しててねーそれだったら一緒に行ってくれる奴がいるじゃないか！って思ったらしく』

「をい…まさか…俺に断りもなく…」

『うん♪すーちゃん、I S学園でも頑張ってね!』

「…マジですか…相変わらず無茶苦茶な人ですね…」

『マジだよ♪それにあいつにも良い経験になるだろ。だってさ』

…どうせ原作にかかわるだろうからI S学園入ろうと思ってはいたが…まさかこんな形で入る事になるとは思ひもしなかったぞ…

「…了解。すぐにI S学園の方には向かうよ…じゃあね、束さん…」

『うん…。すーちゃんも頑張ってねい♪』

『ピッ』

そう言って束さんとの電話を切る。

…ふと視線を感じたのでそちらの方に気を向けると、楓がクスクスと微笑していた。

「翠殿も束殿にかかるとかたなしですね。」

「…聞こえていたのか。…ああ、束さんと会話するといつもあんな
感じだ…いつの間にかペース持っていてかっているという…」

「ふふ…それは兎も角、こちらの片づけは終わりましたよ。」

どうやら電話している間に片づけが終わったらしい。

「流石。正直言って俺にはもったいない娘だよ、楓は。」

「そんな事はないです！私の方が翠殿の方と釣り合うかどうかが不安
なので…」

「いやいや…楓は良く頑張ってると思うよ？」

「という言葉はこれ以上何か楓に言っても延々とループになるだけな
ので飲み込む。」

兎も角その後は夜食（調整をしてたらどうやら2徹していて、その
上日が暮れていた）を取った後、久しぶりの睡眠をとった。

その翌日、俺と楓はIS学園の方へと向かっていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9056r/>

…は？世界の管理者？…まあ、やるしかないのだろうな…

2011年5月29日05時01分発行